



今月のことば

Words of the Month

パンドラの箱

日本弁理士会副会長

高山 和也

日本弁理士会について、その構成する弁理士の年齢とその割合が気になっていたため、この機会に調べてみた。2017年のデータであるが、35歳未満は全体の0.7%、40歳未満だと20.5%で平均年齢は50.17歳である（50歳未満だと56.8%）。

一方、他士業はどうだろうか。弁護士の40歳未満の割合は40.6%であり（2020年、日本弁護士連合会、50歳未満だと66.3%）、公認会計士は34.2%であるから（2021年、日本公認会計士協会、50歳未満だと66.2%）、弁理士とは若い年齢層の割合は大きく異なっている。

なお、不動産鑑定士の40歳未満の割合は11%（2016年、国土交通省、50歳未満だと39%）、土地家屋調査士の40歳未満の割合が8.9%（土地家屋調査士会、2016年、50歳未満だと30.6%）であるから、一概に、士業の中で弁理士の若い年齢層が少ない、というわけでもない。

そもそも、弁理士試験は会社に就職してから、また、特許事務所に入所してから、知財に関する仕事をきっかけに受験することが多いようであることを考えれば、日本弁理士会の弁理士の年齢分布で、特段、若い年齢層が少ないということもないのだろうが、ふと、このままでよいのだろうか、と考えることがある。

この、年齢の分布について何らかの批判的な見解を持っているわけではないが、日本弁理士会の会務活動を行いたいと考えた原点が、「弁理士」という資格や知的財産を広く周知させ、若い年齢層の弁理士を増やし、この業界を盛り上げていきたいとの想いであったことから、何ができるのか、と考える。

さて、「パンドラの箱」とは、触れてはいけない

いこと、を意味して用いられることが多い。それは、日本弁理士会においても存在しているのかは分からない。ただ、先に述べたように、新規に登録する弁理士が少ないことは、この先の知的財産業界を危惧してしまう。AIに代替されるのか、という以前に、業界に携わる人がそもそも減少しているのだ。そうだとすれば、たとえ触れてはいけない、ということでも触れるべきときにあるのかもしれない。

そこで、「パンドラの箱」は、そもそも、触れてはいけないものなのか、その語源となった神話を見たところ、どうやらそうとも言い切れないようだ。開けるのがいいのかは、最後まで分からない。ただ、あなた次第である。

【パンドラの箱を開ける】

触れてはいけないもの、開けると何か悪いことが起きるかもしれないものの例え。

語源は、ギリシャ神話で、神々によって作られ人類の災いとして地上に送り込まれた人類最初の女性とされているパンドラが、神々に、決して開けてはいけないと言いつつ持たされた壺を、好奇心から開けてしまい、そこから、害悪が飛び出したことに端を発する。

このパンドラが開けた壺には、しかし、「 $\epsilon\lambda\pi\iota\varsigma$ 」（エルピス）のみが縁の下に残って出て行かず、パンドラはその蓋を閉めてしまう。

なお、日常、「箱」とされているのは、ルネッサンス時代にエラスムスが、ヘシオドスの「仕事と日」をラテン語訳するとき、「箱」と誤訳したことに遡るようである。

一般的に、この結末は、希望だけが私たちの元

に留まった、と解釈されている。これは、エルピスを「希望」と解釈するからであって、エルピスには、そのほかに、「未来に関する予測」との意味もあることから、エルピスの解釈次第ではこの話が持つ意味は大きく変わる。

このパンドラの壺（箱）の話の記載のあるヘシオドスの「仕事と日」では、パンドラが壺の底に残ったエルピスの状況について、

そこにはただエルピスだけが、決して壊れることのない住居の中、
壺の縁の下に残って、扉から外に飛び出ることがなかった。
雲を集めアイギスを持つゼウスの計画により、彼女はそれが飛び出す前に、壺の蓋を閉じたからだった。
しかしその他の数知れぬ害悪は、人間界に跋扈することとなった。

との邦訳が文献には記載されている。

このエルピスを「希望」と解釈すると、壺に残った「希望」は、住居の中に残ったのであり、それまでこの世に存在しなかった害悪と同様、存在しなかった「希望」が私たちの元に残ったと解釈することとなる。

ただ、文献によると、これは誤解で、ここでのところのエルピスは、「希望」ではなく「未来に関する予測」と解釈すべきであり、パンドラが蓋を閉めたために、壺の中に閉じ込められ、永遠にこの世から消え去った、すなわち、未来について予測することはできなくなったのだ、と説く。文献はこの根拠として、エルピスは良いことも悪いことも含めた予測というニュートラルな言葉で、「イリアス」や他の書物におけるエルピスの用例を指摘する。

エルピスの解釈をめぐるこのような議論がなされているのは、なぜ害悪が入った壺の中に、肯定的に捉えられる「希望」が入っていたのか、という問題があるようである。しかし、仮に、エルピスを害悪と同じ否定的な意味で解釈した場合、なぜ、一部の害悪は外にでて、エルピスのみが壺の中に残るのか、という疑問が残る。エルピスは害悪とは異なり外へ飛び出ることにはなかったの

であれば、エルピスを害悪と同じ否定的な意味として捉える必然性もないように思う。

先に述べたように、エルピスは、良いことも悪いことも含むニュートラルな意味での予測を意味する。そうすると、エルピスが閉じ込められ、失われることは害悪とは異なる性質のものである、と解釈することも許されるのではないか。

未来の予測ができないのであれば、そこに、未来への思考が生まれる。未来が予測できないからこそ、人は、思考し、行動することができるからだ。

パンドラが害悪の入った壺の蓋を開けたからこそ、人は未来への思考を手に入れたのではないか、と考えたくなってしまふ。

翻って、日常的に「パンドラの箱を開ける」と言う場合、触れてはいけないもの、といった意味で使用されている。しかし、日常的なこの意味は、エルピスの解釈によることはない。ここでいう「触れてはいけないもの」、は、パンドラの箱に入っていた害悪が飛び出ることを指しているからだ。そこに残る「エルピス」がなにか、といったことは考慮すらされていない。

文献で述べられているようにエルピスを「希望」ではない「未来への予測」と解釈したとしても、パンドラの箱を開けないことには「未来」に繋がることはない。そうすると、パンドラの箱は、決して「触れてはいけないもの」などではなく、「未来」のために開けるべきもののようにも思えてくる。

パンドラの箱を開けると害悪が飛び出るかもしれないが、エルピスが残る。それによって未来への予測が失われたとしても、予測できない未来に向けて思考する、という機会が得られるではないか。これは希望だ。

開けなければエルピスが存在することはない。

ただの箱である。

(参考文献)

安村典子「パンドラの壺 - エルピスについて -」
(2010、哲学・人間学論叢 = Kanazawa Journal of Philosophy and Philosophical Anthropology)